

## 日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本肥満学会  
理事長 門脇 孝

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

① 肥満症の概念の確立と定義

日本肥満学会では、脂肪が過剰に蓄積した状態である「肥満」から、医療の対象となる集団を抽出するため「肥満症」の概念を提唱した。「肥満症」は肥満に起因ないし関連する健康障害を合併するか、あるいは合併が予測される病態と定義される。従来、国際的にも、肥満が脂肪蓄積のサロゲート指標である BMI でのみ定義されてきた中で、「肥満症」の概念を確立したことは極めて先駆的である。最近の欧米の学会のステートメントでも、BMI のみではなく、健康障害の合併や発症リスクの観点から肥満を再定義することが議論されており、「肥満症」の概念は海外の学問潮流にも影響を及ぼしている。

② 内臓脂肪型肥満の概念の確立

内臓脂肪の蓄積が皮下脂肪の蓄積に比べて代謝障害などの健康障害を引き起こしやすいことから、日本肥満学会では内臓脂肪型肥満の概念を提唱した。また、腹部CTを利用した内臓脂肪面積測定の数値に基づき、ウェスト周囲長を内臓脂肪型肥満の簡易な診断に用いることもガイドラインで推奨してきた。欧米でも、同等の BMI でも健康障害のおこしやすさには個人差があることが認識され、“metabolically healthy obese” という概念も提唱されるようになってきたが、内臓脂肪蓄積の多寡は metabolically healthy obese と metabolically unhealthy obese の違いの主要な説明要因の一つであることが認識されている。

b. 当該領域における国際的な役割

臨床的な面からは、肥満症及び内臓脂肪型肥満の概念の提唱と確立が国際的な学問潮流に及ぼしてきた影響は大きい。またアディポネクチンの発見とその病理学的意義の検討を始め、優れた基礎研究によっても、当該分野の研究を国際的にリードしてきた。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

肥満症及び内臓脂肪型肥満の概念は、メタボリックシンドロームの概念とも密接に結びついており、特定検診・特定保健指導の学術的基盤にもなっている。このような健康保険政策

の決定に対して、本学会が果たした役割は大きいと考える。

d. 学会運営上留意している点

本学会は対象とする疾患の特徴から、治療医学の開発・実践に関わる医学研究者や医師・医療スタッフのみならず、予防医学に関わる保健師や栄養士など多彩な職種の会員が存在する。学会の運営においては、このような多彩な背景を持つ会員のニーズに応えるべく、多様性を重視した運営に心掛けている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本医学会連合に所属する 23 学会によって「領域横断的肥満症ワーキンググループ」が作られたが、2018 年 10 月に開催された第 39 回日本肥満学会では、本ワーキンググループに属する 23 学会が共同で、肥満症の撲滅を目指して協業することを宣言した「神戸宣言 2108」が発出された。以後、2019 年、2020 年と連続して、毎年肥満学会学術集会において、領域横断的肥満症対策に関わるシンポジウムを開催し、それぞれの学会の立場から、肥満症対策についての発表を頂いている。

また、本学会では 2018 年より、肥満症に関わる臨床エビデンス収集を目的として、電子診療録情報のストレージシステムである SS-Mix2 を活用し、診療録直結型肥満症データベースの構築を進めている。肥満症は多くの診療科が関わる疾患であるため、本データベースの構築に際しては上記ワーキンググループに属する 23 学会からの意見も反映している。本データベース事業は日本糖尿病学会が構築・整備を進めている診療録直結型の糖尿病データベースと密接に連携しており、施設の電子診療録上で相互のデータベースに情報を転記可能とする機能を持たせている。